

犬飼町の文化財



# 発刊のことば

犬飼町長 山村昭三

犬飼町は、昭和三十年三月に長谷村・犬飼町・戸上村の三方町村が合併し、同年八月に旧長谷村の一部が大野町へ、昭和三十二年四月に旧戸上村の一部が野津町にそれぞれ編入され、現在の犬飼町となりました。本町は、町の中央部を南北に「母なる川」大野川が流れ、川と共に栄えた町であります。

私たちの町を遡りますと古く、旧石器時代から人が住み着いていたことが、市の久保遺跡（高松地区）等の出土品からうかがえます。

また、岡藩時代の明暦二年に川舟の港、犬飼港が開港すると、御蔵所が建設され、商人が藩内外から移り住み町が形成されてきました。以来、藩主の江戸への参勤交代や物資輸送の通路となり、犬飼町繁栄の基礎が築かれました。

このような歴史を踏まえ、申すまでもなく文化財は、先人が残してくれた貴重な遺産であります。私たちは、この貴重な遺産である文化財を保護し、これを後世に伝えることが私たちに課せられた重要な責務であります。国においては、このような文化財を保護するため、昭和二十五年に文化財保護法を制定し、これら文化財を守ってきました。犬飼町においても昭和四十八年に犬飼町文化財保護条例を制定し、文化財調査委員各位のご協力をいただきましたが、保護に努めてきたところであります。

このたび「豊後大野市」としての町村合併を目前にして、犬飼町の文化財を広く町民の皆様を知っていただくと共に後世に伝えるため本誌を発刊いたしました。

本誌の発刊により町民の皆様が犬飼町の文化財への理解を深められ、国民すべての財産として愛護していただくと共に文化財保護にご協力を賜りますようお願いを申し上げます。次第でございます。

終わりにりましたが、本誌発刊にあたり、各種の資料を提供いただいた各位に深く感謝申し上げます、発刊のあいさつといたします。

平成十七年二月二十八日

# 発刊によせて

教育長 安藤恒美

この度、町文化財調査委員会の方々のたいへんな努力で『犬飼町の文化財』を刊行することが出来ました。本町の町誌が発行されて二十五年以上が経過し、以後の調査研究で新しい文化財が発見されて改訂も話題になりましたが、態勢が整わずに今日まで見送られてきました。しかし、平成十七年三月には町村合併によって「豊後大野市」として新たな出発を迎えるに当り、犬飼町としての最後の記念事業として、また、町名は變つても郷土の歴史は永久の宝物として大切に未来に伝えるのも行政の責務と考え、急きよ発刊を計画した次第です。時間的余裕も無く無理を承知の上でお願いしましたところ、委員各位には快諾をいただき、資料収集・執筆・写真撮影・校正等に精力的に取り組んでいただき、計画どおり刊行することができました。これで本町の文化財が新市に確かに継承され根づいていくことでしょう。

文化財は、本町有史以来、先人が営々と築き上げてきた足跡であり大いなる遺産であります。戦いの犠牲者を弔い、或は国や村や家の安穩を祈り、ある時は己の死後の極楽浄土を願って残されたものです。それらが現存するからこそ今を生きる私達は、昔の人々の息遣いを知ることが出来るのです。

町民をはじめ既に町外に転出された方々には、生まれ育ったふるさとの文化遺産を懐かしみ、先人の歩みを脳裏に呼び起こし、犬飼町の魅力を再発見していただきたいと思えます。また、歴史研究者や学校の先生方の資料として活用いただければ編集意義もいっそう増すものと考えます。末長いご愛読をお願いします。

平成十七年二月二十八日



# 新飼宝塔

所在地／犬飼町黒松  
指定区分／県指定有形文化財  
指定年月日／昭和五十年三月二十八日



黒松庵の横の山道を少し登った雑木林の中に、宝塔が二基並んで立っている。ともに凝灰岩で造られ、南北朝時代の貞治六年（一三六七）十月に造立されたものである。

向って右側は、欠損箇所のない完全な形を保っており、総高二メートル三十一センチである。ふつう、相輪部分や笠の部分に欠損していることが多いが、建立から六百三十年以上を経てなお完全な形で残っている宝塔は大変珍らしく貴重である。

左側の宝塔は、形や大きさは右側の宝塔と同様であるが、相輪は一度折れて欠落したものを接いで補修している。また、笠及び基礎の一部分が欠損している。

二基とも「為逆修也」と刻銘があり、逆修塔として造立されたもので、右側が「仏子・正善」、左側が「比丘尼・仁正」と名前が刻銘されている。

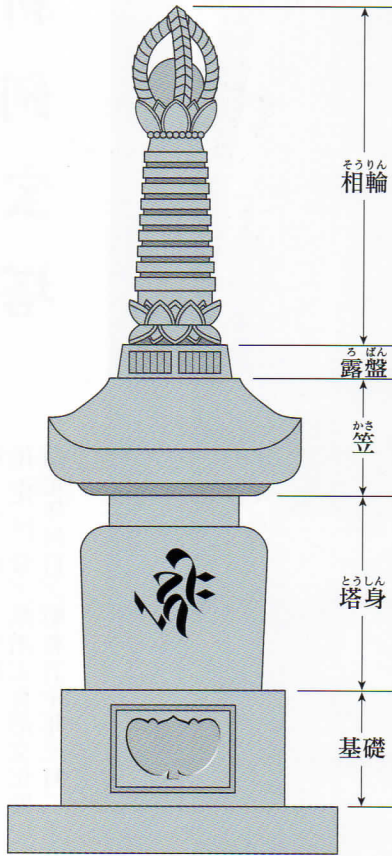
逆修塔とは、自らの供養のために生前に造立された塔のことである。正善と仁正はともに仏に仕える信心深い夫婦であったのである。

宝塔は全般に丁寧に造られており、相輪上部の宝珠は火焰で覆い、露盤は各面を二区分して縦連子が彫られている。塔身には、金剛界四仏の種子が葉研彫りされており、基礎にはふっくらとした美しい格狭間が彫られている。



# 宮脇宝塔

所在地／犬飼町黒松  
指定区分／県指定有形文化財  
指定年月日／昭和五十二年三月三十一日



《宝塔》

黒松地区にある阿蘇神社社殿の左横に、数基の石塔とともに立っている。

享和三年（一八〇三）に編纂された『豊後国志』に、大友家十三代親綱の墓として、「阿蘇十二社林叢中に在り」と紹介されている宝塔である。但し、塔身にある墨書の紀年銘「貞和四年戊子二月九日」は、西暦一三四八年にあたり、親綱の没年長祿二年（一四五八）より百十年も前に造立されたことになり、疑問が残るところである。全体に丁寧<sup>ちやうじん</sup>に造られているが、宝珠の火焰部分と笠の三隅が少し欠損している。総高は二メートル四十三センチである。

露盤は笠と一石で、各面を二区分し縦連子が彫られている。塔身には新飼宝塔に彫られているような金剛界四仏の種子はなく、六百年以上を経てもなお墨書銘が薄く残っている。また塔身の首部にはお経を納めた納経孔<sup>のうきょうあな</sup>が穿たれており、かつては経筒に入れたお経が納められていたのであろう。基礎には、形の美しい格狭間<sup>こうざま</sup>が四面に彫られている。



# 大聖寺宝篋印塔

所在地／犬飼町柴北  
指定区分／県指定有形文化財  
指定年月日／昭和五十年三月二十八日



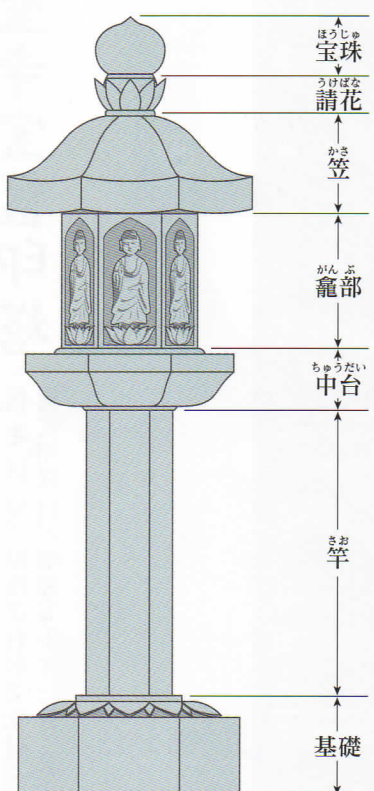
禅宗の古刹大聖寺境内の中に、宝篋印塔が三基ある。その一基が大聖寺を創建した不肯正受禅師の「開山塔」と呼ばれる宝篋印塔である。総高は、二メートル六十二センチあり、南北朝時代の貞治五年（一三六六）の造立である。露盤は笠と一石で二区分されて、各各格狭間が彫られている。基礎にも二重枠の中に格狭間が彫られている。宝珠を囲む火焰の形・相輪全体の形状・笠の上部の縦連子・その上の小さな作り出し等の特徴からして、当時大野川流域で活躍した名石工沙弥玄正か、その流れを汲む石工によって造立されたものであろう。

塔身の表側には円の中に「開山塔」と彫刻されており、裏側には「不肯正受禅師貞治五丙午季二月初八鳥」と紀年銘が彫られている。



# 藤ノ木石幢

所在地／犬飼町高津原藤ノ木  
 指定区分／県指定有形文化財  
 指定年月日／昭和五十八年四月十二日



《石 幢》

町道柴北高津原線を貫く道路の途中から左へ曲がって野道を五分程歩いた墓地の入口に立っている。大正時代の中頃、道路拡張工事の際に道路脇にあつたものをこの地に移したといわれている。

高さは二メートル七センチである。

笠は二箇所少し欠損しているが、円形で軒口に垂木を刻んでいる。笠の裏には「応永十二年（一四〇五）乙酉二月十八日」の紀年銘と、結衆の人々の名前及び逆修の文字が墨書されている。結衆の人々の生前供養のために造立されたのであろう。

龕は一般的に多く見られる四角形ではなく円形で、六体の地藏像と閻魔大王及び不動明王が彫られている。尊像はかなり深く彫られており、破損も少ない。笠や中台の大きさに比して龕部がやや小さく感じられる。

中台は上部が円形で、下部は四角形という変わった形をしており、竿もまた上部は四角形で、下部は八角形という変わった形をしている。

基礎は円形の自然石の中央部をくりぬき、竿を差し込んでいる。あまり見かけない珍しい形の石幢である。



# 大聖寺阿弥陀如来座像

所在地／犬飼町柴北  
指定区分／県指定有形文化財  
指定年月日／昭和六十三年三月十五日



恵日山大聖寺の本尊である。禅宗の寺の本尊としては極めて珍しいことである。これは開基である大友親綱（大友十三代・長祿三年（二四五九）二月没）が、阿弥陀如来を尊崇していたことから本尊として安置したためである。この阿弥陀如来は、恵心僧都（源信ともいう、九四一〜一〇一七）一刀三礼（ひとのみふるつては拜んで刻む）の作といわれ、上品下生の仏といわれている。松材で造られ、像高は八十七センチである。

昭和五十八年八月慶應義塾大学の西川新次教授が調査のため、県文化課の和吉心良氏の案内で訪れてこの仏像を調査され、「この仏像は、中央の優れた仏師の作で、平安後期の仏像である」との所見を述べておられる。

また平成元年七月に九州大学の菊竹淳一助教授が、県文化課の案内で訪れて調査をされ、「平安後期の仏像として貴重なものである」との所見を述べておられる。

阿弥陀とは、サンスクリット語（古代インド語）で、アミターユス（無量寿と訳す）アミターバ（無量光と訳す）といい、無限のいのちや智慧の働きをいう。永遠の時間にわたって無限の智慧を働かせて、一切衆生の生きる力となるうのである。

この阿弥陀信仰は平安時代に高まり、鎌倉期以降は、一般庶民の間へとひろまっていくのである。



# 九品寺跡石幢及び五輪塔群

所在地／犬飼町栗ヶ畑  
指定区分／町指定有形文化財  
指定年月日／昭和四十九年七月一日



栗ヶ畑字小野の九品寺跡といわれるところに大小の五輪塔・宝篋印塔・庚申塔などがある。その中に大きな石幢の竿の部分が一基立っている。竿の高さは一メートル五十二センチあるので、完全な形の石幢にすれば三メートルを優に越える大変大きな石幢であったと思われる。

四角形の竿の一面に銘文が彫られている。それによれば、文安二年（一四四五）三月二十七日に、大神実次という人と藤原氏の出で戒名が祥妙という二人が、七分全得を祈願して造立した逆修塔である事がわかる。大神氏は、大友氏以前に大野郡一帯で勢力をふるった一族であるが、実次については今のところ史料も伝承もないので不明である。

近くには、あまり大きくはないが高さ九十センチ前後の五輪塔が四十一基と、火輪だけが二十六基、それに宝篋印塔の笠、及び格狭間の彫られた基礎がそれぞれ二基ある。

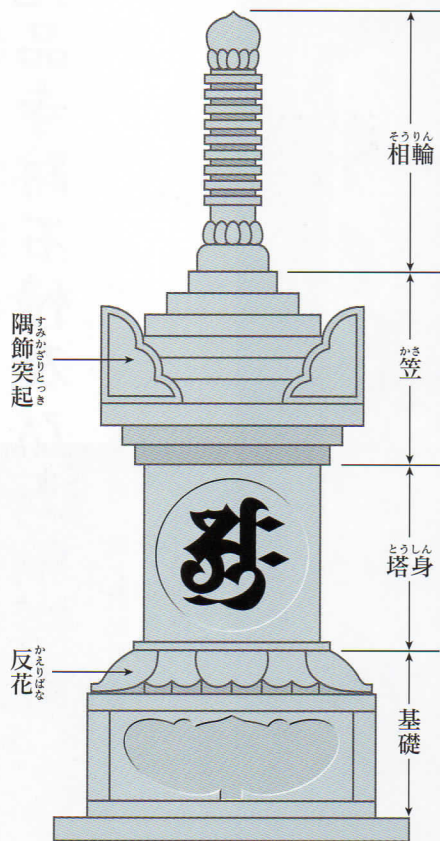
いずれにも銘文の彫られたものはなく、いつ頃どの様な目的で造立されたものかわからない。また、江戸時代の年号の入った庚申塔八基も共に祀られている。

これらは、九品寺跡一帯に転っていたり土の中に半分埋っていたものを、所有者である甲斐正俊氏の祖母が昭和初期頃に集めて祀ったものである。



# 黒松宝篋印塔

所在地／犬飼町黒松  
 指定区分／町指定有形文化財  
 指定年月日／昭和四十九年七月一日



《宝篋印塔》

黒松地区の県道脇に「金輪山正福寺」と書かれた扁額の懸かった、通常「黒松庵」と呼ばれる庵の脇に建立されている。

造立時期を示す紀年銘は彫られていないが、笠の様式・格狭間の形・その他から南北朝時代に造立されたものと推定される。

宝珠が欠失しているが、他に欠損箇所はなく均整のとれた宝篋印塔で、高さは二メートル十三センチある。

相輪の輪、請花、反花等の彫りは全般に浅く彫られている。露盤は笠と一石で、各面を二区分して縦連子が彫られており、その上に作り出しがあるのは珍しい。

笠は幅の割に厚みがあり、上側及び下側にそれぞれ二段の段形がある。なお、隅飾突起の外側への反りが小さいのは古い様式と見ることが出来る。

露盤が縦連子で、笠の上段が格狭間、下段が単弁の花びらという形は康暦三年（一三八一）造立の石井宝篋印塔と同じである。

塔身は方形の枠の中に月輪が刻まれ、基礎は、格狭間と下部に蓮弁が彫られている。



# 高津原石幢こうづはら いしじょう

所在地／犬飼町高津原  
指定区分／町指定有形文化財  
指定年月日／昭和四十九年七月一日



高津原地区の民家に隣接して小さなお堂が建っており、その中に祀られている。

地区の人は地藏様と呼び、昭和六十年ごろまでは一月二十四日と八月二十四日に食べ物を作って持ち寄り、お接待の行事をしていた。また火防の神として崇められ、現在も正月の第三日曜日に大聖寺の和尚に来ていただき、お経をあげてもらう行事は続いている。

天文十八年（一五四九）三月の造立で、高さは二メートル四センチある。

笠は円形で、軒口には垂木が刻まれ、内ぐりはやや浅い。

龕部は四角形で、各面を二区分して六地藏と閻魔が彫られており、風化も少なく良好な状態に保たれている。

中台は円形で、花卉模様を全体に線彫りしている。

竿は四角形であるが面取りしており、多数の銘文が彫られている。それによれば、明妙と満優という二人が六躰の地藏尊像の塔を造立して仏様の功德を願うと共に、この地域が現在及び未来にわたって安楽の地であることを祈ったものであることがわかる。また、安政元年（一八五四）の冬の地震で塔がこわれたので、地域の善男善女が発願して安政二年の春に再建し供養したということも刻まれている。江戸時代から地域の人々の深い信仰を集めてきた地藏様である。



# 親綱宝篋印塔

所在地／犬飼町柴北  
指定区分／町指定有形文化財  
指定年月日／昭和四十九年七月一日



柴北地区の大聖寺境内に、「開山塔」とよばれる宝篋印塔と並んで建立されている。

『豊後国志』に「大友親綱墓、大聖寺中亦有一塔、刻日、長祿三年二月」とあり、黒松地区の宮脇宝塔とともに大友家十三代親綱の墓と伝えられてきた宝篋印塔である。長祿三年は、室町時代で西暦一四五九年になる。

宝珠を囲む火焰は、大部分欠損しているが、総高は二メートル九センチである。

露盤は、各面二区分され格狭間が彫られている。笠の上二段は、縦連子の段と連弁の彫られた段があり、下には二段の段形がある。隅飾突起には渦紋があり、一隅は半分程欠損したところがある。

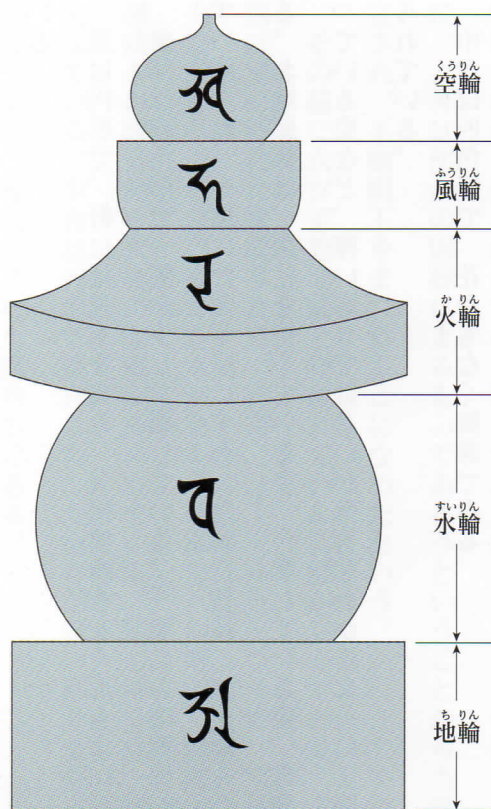
塔身正面には、親綱の戒名である「大聖寺殿前左京兆耀山光君公菴主」の頭書の部分「大聖寺殿」が円の中に彫られ、裏面には、「耀山光君大居士 長祿三己卯二月初六日」と彫られている。基礎は二重枠の中に格狭間が彫られ、上には二段の段形と下部には連弁が彫られている。

隣に並ぶ「開山塔」より少し小さいが、相輪・笠及び基礎の格狭間の形などは大変よく似ている。



# 大聖寺五輪塔

所在地／犬飼町柴北  
 指定区分／町指定有形文化財  
 指定年月日／昭和四十九年七月一日



《五輪塔》

大聖寺境内の山門をはいってすぐ左側にある。制作年代は不詳であるが、南北朝時代と推定される。水輪には、四面に金剛界四仏の種子が刻まれている。総高は一メートル二十八センチである。



# 愛宕石幢

所在地／犬飼町柴北  
指定区分／町指定有形文化財  
指定年月日／昭和四十九年七月一日



柴北圓行寺の上の高津原方向へ通じる道路を、車で一・二分程走ると右側に墓地があり、そのはずれの櫟林の中に立っている。地区の人々は愛宕様と呼び、折りにふれお参りしている。特にお地藏様の縁日とされている二十四日のうち一月二十四日と八月二十四日は、地区の人々が集まりお参りしている。戦国時代の永祿四年（一五六

一）の造立で、総高二メートル四十五センチある。  
宝珠は石幢では珍しく火焰を伴い、請花には蓮弁が線彫りされている。

笠は円形で、軒には垂木を刻み、欠損箇所もなく形もよい。

龕部は四角形で一隅が少し欠損している。三面にお地藏様が二体ずつ彫られ、一面には蓮華座にすわった観音菩薩二体が彫られている。お地藏様は、錫杖を持っている姿、合掌している姿、数珠を持っている姿など、深い彫りではないが像容がわかるように丁寧に彫られている。

中台は四角形で、花卉もなく簡素である。

竿は四角形で、その一面には多数の銘文が丁寧に彫られている。

それによると、永祿四年辛酉三月二十八日に松岩宇漆居士の十三回忌で菩提を弔うために建立したようである。

基礎も四角形で、一石を二段に作り出して、中をくりぬき竿を差しこんでいる。



# 六ツ子庵石幢

所在地／犬飼町柴北  
指定区分／町指定有形文化財  
指定年月日／昭和四十九年七月一日



圓行寺の境内に不動明王堂（六ツ子庵）がある。徳川時代中期の享保年間に創建されたものと推定される。

当堂が「六ツ子庵」と呼ばれる由縁について次の様な伝承がある。その当時宵闇迫る頃になると、六才ぐらいの幼児が近くに流れる柴北川のほとりより忽然と現われ、小声にて泣きながら当地に来たり、消ゆるが如く姿をかくすこと度々であった。そうした奇異な出来事に、人々は何かの因縁によるものであろうということから当堂が建立され、不動明王をまつることになったという。

その脇に六ツ子笠地藏と呼ばれている石幢が立っている。造立時期は室町時代と推定される。総高二メートル五センチで、宝珠には火焰があり、笠は円形で垂木がある。龕部は八角形で、閻魔大王と横向きの観音像と六体の地藏が彫られている。顔の部分は一樣に欠失している。中台は円形で複弁になった蓮弁が深い彫りで刻まれている。竿は、面取りされた四角形である。



# 浅草流黒松神楽

所在地／犬飼町黒松  
指定区分／町指定無形民俗文化財  
指定年月日／昭和五十六年六月二十四日



神楽は鎮魂、招魂の神事における神事舞で、民族の古い信仰にその端を発している。古くは、一定の形式のないものであった。

それが芸能としての形をとるに至って、各時代の歌謡や舞いや能や外来楽をも取り入れて、神事の内容を豊かにしていった。古い信仰の形式や、各種の芸能の様式や内容を今日にみる点ができる点で、神楽は文化史の上からも貴重なものである。

現在、日本全国津々浦々に分布している神楽は、出雲佐陀大社の神事から発した出雲流の神楽である。それがまた各地の古風な神事と結びついて、各地流の神楽として発展していった。（小学館発行『日本大百科事典』による）

黒松神楽は、江戸時代の末期より大野町浅草八幡社から伝わった浅草流で舞い始めた。

楽員は黒松地区の人のみで構成し、代々引き継がれている。各地の祭り等に出かけて舞ってきたが、特に盛んだったのは第二次世界大戦中であつた。近隣の町村はもちろんのこと、臼杵市や大分市にも出かけた。出征兵士の家族より無事を祈つての舞いを数多く依頼されたという。

現在は、楽員十二名で減少傾向にある。舞いも年四回で、黒松の春秋の祭り二回、それに柴北地区と久原地区の祭りに出かけるのみである。



# 武藤家長屋門

所在地／犬飼町長畑  
指定区分／町指定有形文化財  
指定年月日／昭和五十八年一月二十日



〈正面〉



〈側面〉

武藤家はもと大庄屋で、旧藩時代は長畑・山内・栗ヶ畑の三大字を所管していた。

邸宅は広大で、長屋門は北側にあり、その建築規模や方法からして大庄屋を偲ばせるものがある。

昭和五十五年に大阪工業大学教授（建築学）の工学博士青山賢信氏が調査されて、建築年代は江戸末期のものらしいが、石垣等は江戸中期以前のもので推定されている。

間口は、南側九メートル二十五センチ、東側三十一メートル四五センチ、奥行五メートル五十五センチで、東南に金の手に造られている。暴風雨などによる倒壊を防ぐために建て増したものとわれている。

中央に間口三メートル七十五センチの潜り門があり、村人はこの潜り門から出入りしていたという。（正門は邸の南側にある）この潜り門の南側に馬屋と堆肥舎がある。北側には二十平方メートル程の部屋があり、少人数の会合や子供の手習いなどに使用したらしい。現在もその面影を残している。またその隣りには三十三平方メートル程の大部屋があつて部落の集会などに使用されていたらしいが、現在は取壊わされていて空地になっている。

以前はこの長屋門は草葺であつたが、大正十二年近所に火災が起きたため、危険であるということで、その直後に瓦に葺替えたという。

昭和五十六年当主の武藤弘氏は、長屋門がかなりいたんで危険な状態となり取壊そうとされたが、各方面からの慰留もあつて思い止まり、大修復してこの建造物が残ることとなった。



# 大聖寺聖観音像

所在地／犬飼町柴北  
指定区分／町指定有形文化財  
指定年月日／平成六年二月二十八日



観音菩薩には多くの種類があるが、その中で基本的形の観音菩薩を特に聖観音と呼んでいる。六〜七世紀になって、いろいろな変化（へんげ）観音（千手観音・十一面観音・如音輪観音・馬頭観音等）が成立してから、それらと区別するための呼称であり、聖観音は本来の観音菩薩との意味である。数ある観音菩薩を代表するのが聖観音で、像には立像と座像とがある。

観音菩薩は、阿弥陀如来の脇侍（わきじ）で、阿弥陀如来の左側（向って右側）が観音菩薩であり右側が勢至菩薩である。（現在、大聖寺には創建当初からの勢至菩薩像は残存しない。）

この聖観音について、九州大学の菊竹淳一助教授の鑑定によると、室町時代の作とされ貴重な文化財であると判定されている。像の高さは四十三センチである。

観音菩薩については、法華経第八卷観世音菩薩普門品（ふもんぼん）にその働きが説かれている。そこには、彼の観音力を念ずれば火難・盗難などあらゆる諸難苦しみを恐れることはないとあり、どんなに生きる力にとぼしい人でも勇氣と力が与えられると説く。

観音とは、「音を観る」と書くように、透き通ったあたたかい目で見とるように、一切衆生（しゆじゆうせい）の苦しみを明らかに観（み）とるのである。このように、正しく清らかに、そしておおらかな智慧の眼で、憐み深い美しい目の持主が観音菩薩である。



# 大聖寺達磨像

所在地／犬飼町柴北  
指定区分／町指定有形文化財  
指定年月日／平成六年二月二十八日



達磨はふつう座しているが、この大聖寺の達磨像は写真のように立っており、たいへん珍しい姿である。高さは六十三・五センチである。

九州大学の菊竹淳一助教授の鑑定では、室町時代の作風をとりいれた江戸時代前期の作であり、立派な像であるとの評価をされている。

達磨は菩提達磨ぼだいだるまといい、五世紀末から六世紀末の人といわれている。南インドの香至王の第三子として生まれ、般若多羅ぼんにやたらから教えを受けて大成し、晩年東方の宣布を志し、海上幾多の困難を経て中国は広州に渡り禅宗を伝えた。中国禅宗の第一祖としてあがめられている。

中国河南省登封県の少林寺（四九六年創建、達磨大師が悟りを開いた寺）で、面壁（壁に向って座禅）九年にわたる座禅の結果、その手足が動かなくなつたという故事にちなんで、手も足もないダルマの姿が描かれるようになったという。



# 大聖寺弁財尊天像

所在地／犬飼町柴北  
指定区分／町指定有形文化財  
指定年月日／平成六年二月二十八日



江戸時代後期の文政十一年正月に大聖寺の現状について藩の寺社奉行に報告した書類によると、弁財尊天は鎮守大弁財天神となっている。そしてこの弁財天を祀る九尺に九尺の瓦葺の建物があったようである。それが、明治七年京都の本山に提出した寺の現状報告では、鎮守大弁財天神を祀る建物はなくなっている。これは明治初年に、政府が仏教排斥運動を行なった時に、神に関するものは総て寺院から排除してしまったが、そのために弁財天を安置した建物が取り除かれたのではないかと思われる。像の高さは三十七センチ、台座を入れると五十七センチである。

九州大学の菊竹淳一助教授が来山した際、内陣の檀家仏壇にある厨子を見て、これは何かと問われたので、全く開いたことのない厨子を開いた。すると助教授は、「これは弁財天で、この場所に祀つてあるのはおかしい。他所に祀るべきである」と言われて、その後現在のお堂を建立して祀ることとしたのである。

このことは、明治初年の廃仏毀釈の時、大聖寺の鎮守である弁財尊天を、寺から外部へ持ち出されることを恐れたために隠したのであろうと推測されている。

弁財天は人に対して無礙弁才を授け、幸福と智恵を与え、延寿・財宝を得るようにはかり、天災地変を除滅し、戦勝をもたらす仏神として崇敬された女神で、七福神の一つである。



# 虎御前宝篋印塔

所在地／犬飼町高津原山田  
指定区分／町指定有形文化財  
指定年月日／平成八年八月一日



山田地区から三ノ岳なかよしパークに通じる道路の途中、柚河内地区から山道を五分程歩いた尾根上に立っている。

地域の人は虎御前と呼んでおり、お参りすると齒の痛みや婦人病に靈験があると言い伝えられ、戦前まではかなり遠方からもお参りに来る人がいたとのことである。

虎御前と称される宝篋印塔や五輪塔は、県内各所に存在している。鎌倉時代、源頼朝が富士の裾野で巻き狩りをした時、曾我兄弟を手引して工藤祐経の泊っている幕舎を教え、仇討ちの本懐を遂げさせたのが白拍子の虎御前だといわれている。頼朝に捕われ責められた時、頼朝の側近であった大友能直に何かと助けられたため、能直が豊前・豊後の守護職に任じられた後、彼を頼って豊後に下り、曾我兄弟の菩提を弔いながら西国三十三箇所を巡ったと伝えられている。

宝珠と火焰が欠損しているが、高さは一メートル八十五センチある。造立は、南北朝時代の文和三年（一三五四）七月と塔身に彫られている。さらにまた塔身には、やや小さめであるが金剛界四仏の種子が、各面に薬研彫りされている。

笠の隅飾突起は一箇所欠損しているが、基礎の格狭間の形は、新飼宝塔や宮脇宝塔に似ており優美である。



神<sup>かん</sup>

宿<sup>じゆく</sup>

橋<sup>ばし</sup>

所在地／犬飼町柴北  
指定区分／町指定有形文化財  
指定年月日／平成八年八月一日



犬飼町長谷地区を従貫する道路は、西は大野町の土師<sup>はじ</sup>から犬飼町部に通ずる主要道路である。そこで、柴北川には木橋を架けて犬飼への交通を確保していた。しかし、木橋は夏季の増水等で、度々破損したり流失したりした。

当時の村長、郡会議員は石橋架設の提案をして議会等の理解は得るものの、工費があまりに多額なため実現には至らなかった。

しかし、安部義人村長になると、前からの計画を実行できるよう、熱心に各方面に働きかけた。村費負担に加え、郡費の補助、篤志家の寄付等により、大正九年には工事にとりかかることができた。翌年五月には落成している。

橋は単アーチ型で、長さ二十七・八メートル、幅三・三五メートルで、石の質もよく、すき間なく整然と積まれた石の姿は、石工の技術の高さを示しており、実に美しい。

下から見上げると、とても八十数年を経過した橋とは思えない新鮮さと気品がある。

近くに記念碑がある。



# 黒松阿蘇社鳥居

所在地／犬飼町黒松  
指定区分／町指定有形文化財  
指定年月日／平成八年九月二十四日



黒松地区の阿蘇神社参道入口の県道脇に、がっしりとした、見るからに古風な明神型鳥居が立っている。

阿蘇神社は、延文六年（一三六一）四月五日に阿蘇惟村が出した「井田郷十二貫文寄進状」等の文書から、南北朝時代に創建されたと考えられる。また阿蘇社の由緒書には、「社殿を創建、此時華表一基を建つ」とあるので（「華表」とは鳥居の別名）、この鳥居も南北朝時代の造立と推定される。しかもこの鳥居は、この時代の特徴をよく備えており、石材は太いものを用い、柱間の広さに比して背が低く、笠木の反り及び反り増しは、ほとんどない。また、笠木の厚さに比して島木の厚さが薄い。柱は四角形で大きく面取りされている。また、柱と柱の間隔は、上部より下部がわずかに広く、いわゆる「転」は小さい。通常、石造鳥居の場合、笠木は額束の上で継がれている場合が多いが、この鳥居の笠木は、端から端まで一石できている。

大分県内で最も古い紀年銘「観応二年（一三五二）」のある千歳村の平尾社旧鳥居に、大きさや形が大変よく似ている。

江戸時代以降は、石の鳥居が多く造られたが、それ以前は木の鳥居が主で石造鳥居は大変少なく貴重な鳥居である。

笠木の上までの高さは、三メートル十五センチで、柱の中心から中心までの広さ、いわゆる「真々」は下部で二メートル六十七センチである。



# 千束石幢せんそくせきどう

所在地／犬飼町黒松  
指定区分／町指定有形文化財  
指定年月日／平成八年九月二十四日



かつては黒松から栗ヶ畑へ通じる、主要な道路の一つであった千束上村の山道の脇に建立されている。

町内にある石幢せきどうの中では最も大きく、総高は二メートル五十六センチある。特に大きな欠損箇所もなく、全体にバランスの良い優美な石幢である。

紀年銘や造立目的等は彫られていないが、願主と思われる「道清・妙慶」という、仏門にある人の名前が竿さおの部分に刻まれている。

造立時期は、室町時代と推定される。

笠かさ・龕部がんぶ・中台ちゆうだい・竿さお・基礎全てが円形であるのは大変珍しく、当町では、この一基だけである。町内には、指定、無指定を含めて石幢は十基余あるが、龕部及び竿は四角形という例が多い。

宝珠ほうじゆには火焰くわんがあり、請花うけばなの部分には蓮弁れんぺんが線彫りされている。

笠は内ぐりが深く、軒先には垂木たるきが刻まれており、わずかに朱も残っている。

龕部の八尊像の彫りは深く、特に大きな欠損部分はない。六地藏の他は、閻魔様えんまとお釈迦様しやくかが彫られている。

中台は蓮弁もなく簡素である。

竿は、丁寧ていねいに造られた円形の基礎部分にしっかりとほめ込まれ安定している。

地域の人々は、近年まで、歯の痛む時にお参りして歯痛の止むのを祈ったということである。



# 両<sup>りよう</sup> 村<sup>そん</sup> 橋<sup>ばし</sup>

所在地／犬飼町柴北  
指定区分／町指定有形文化財  
指定年月日／平成十二年八月二十四日



千歳村の久保山地区と犬飼町の柴北地区の間を流れる柴北川に架けられた、長さ二十八・六メートル、幅三・九メートルの単アーチ型の石橋である。

この地は、昔より飛石で人の往来が行われていた。しかし、時代と共に人の往来や物資の移送も多くなり、架橋に対する要望は強くなっていった。

現在では犬飼町と千歳村との境界であるが、当時の行政区としては長谷村と井田村の境界であった。特に井田村の久保山地区は犬飼町に出るための要所であり、強い要望を出していた。

両村は、まず県に働きかけて県費補助金九百十八円を得ることができたことで、架橋についての議決まで漕ぎつけた。

柴原村の足立初夫氏との間で石橋及び付属工事についての契約を結び、契約金は四千八百円であった。昭和十三年十二月に起工し、昭和十四年五月に竣工している。

両村橋の碑文に「竣工式では衛藤善太郎氏夫妻の渡り初めがあり、多年の宿望が達成された両村民はいよいよ親交も厚くなり喜びにわいた」と記されている。

現在では、石積みが少し張り出す等老朽化の傾向にあり、車輛通行止めとなっている。現在は数メートル上流にコンクリート橋が建設されて、両岸の道路も広くなり整備されている。



# 大聖寺五輪塔群

所在地／犬飼町柴北  
指定区分／町指定有形文化財  
指定年月日／平成十四年三月一日



平成元年のほ場整備事業の際土中より多量の石造物が見つかり、それを平成十四年一月大聖寺脇に整備し祀ったものである。明治の神仏分離政策による廃仏毀釈によって、土中に埋められていたものと推定される。

造立時期は、鎌倉時代から江戸時代にわたっており、現在整備されているのは五輪塔八十八基である。その中には、六基の一石五輪塔が含まれている。

高さは、一番大きいもので一メートル三十三センチ、他に一メートル三十七センチくらいが二基、一メートル二十七センチ程のものが五〇六基、あとは七十〇八十七センチのものが多い。

一石五輪塔は七十七センチのものが一番大きい。

鎌倉時代の紀年銘のある五輪塔が二基あり、空・風・火輪にそれぞれ種子しゅじが彫られている。火輪には四面に同じ種子が深く薬研彫りやげんぼされている。水輪には、「正中二年（一三二五）乙丑八月十三日沙弥道念存生時造立之」と彫られており、高さは一メートル七センチある。もう一基は、「正中二年乙丑八月十三日蓮阿存生時造立之」と彫られており、高さは一メートル三センチである。これは夫婦の逆修塔として造立されたものと思われる。

近くにはまだたくさん五輪塔が埋まっているという。



# あとがき

長い間の念願であった『犬飼町の文化財』が刊行されることになり、昨年の四月から準備をはじめました。解説などの執筆は、文化財調査委員六名が分担し、写真もまた、調査委員二名が担当して撮影しました。執筆にあたっては、多くの人が気軽に読めて、この冊子を片手に文化財の現地探訪をしてもらえるように、ということを考慮して記述しました。

準備期間も短く、また十分な資料が得られない為、内容その他で不備な点が多々あると思いますが、後日の研究・補足を待ちたいと思います。

平成十七年二月

文化財調査委員長 後藤克典

文化財調査委員 由見 認

同 後藤宏彰

同 足立庄市

同 橋本尚武

同 佐藤順一

教委生涯学習課長 田嶋栄一

同 参事 足立完治

同 臨時職員 赤峰洋子

写真撮影 後藤克典

同 佐藤順一



犬飼町の文化財

犬飼町教育委員会